

日本の文化が注目を集めている現在だからこそ、日本文学の“いま”を海外に紹介する刊行物を。

文学には、それを生み出す個人的背景だけではなく、その国の精神風土や伝統文化といったものが反映される。それゆえ、その国の文学を読むことは、その国に生きる人々や状況を知ることにもつながる。日本文学を海外に広く紹介する目的で刊行されてきた『Japanese Literature Today』が、このたび復刊された。

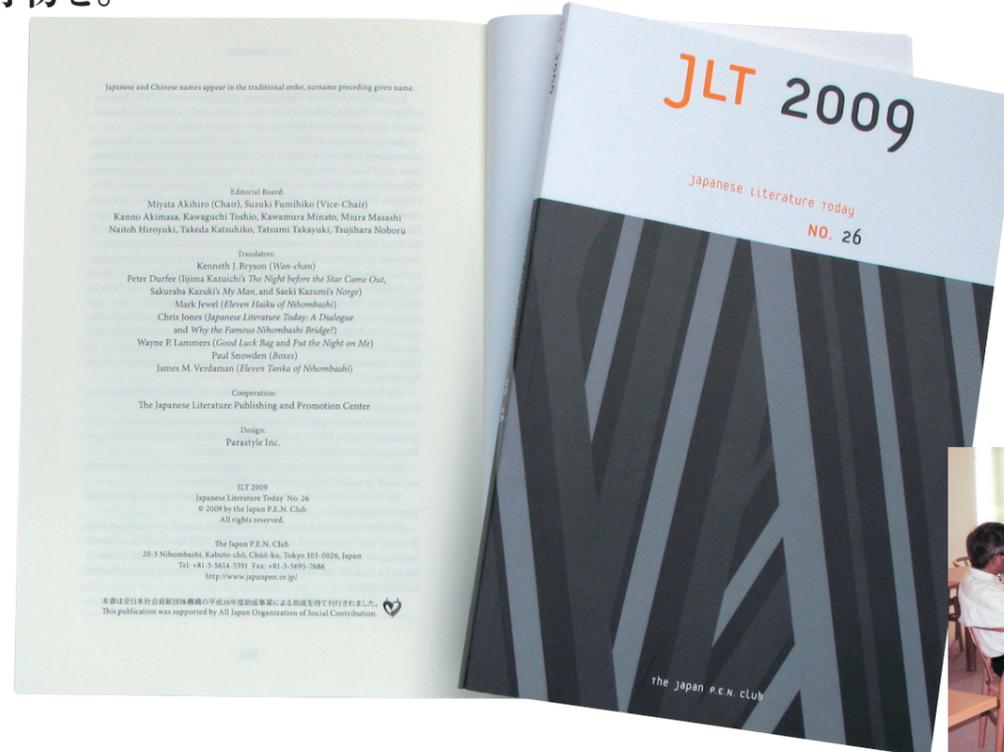
2000年度版の刊行を最後に、休刊状態にあった『JLT』。



英語や仏語で出版されていた、かつての『JLT』

漫画やアニメなどのサブカルチャーを中心とする、いわゆる「オタク文化」が、日本のみならず、海外でも話題となっている。しかし、それらは、ある日突然に出現したものではない。それがどこから来たものか、丹念に根を探っていけば、養分を吸い上げている土壌のひとつ塊に、日本文学というものがあることに気づくのではないだろうか。それゆえ、その時々の日本文学の現状を知ってもらうことは、現象として見えている文化の背景にあるものを理解してもらうことにつながる。

文学を通じ、国際理解を深め、言論表現および出版の自由を擁護し、世界平和に貢献することを目的として活



復刊された『JLT』(左)と編集会議の様



動している組織に「国際ペン」がある。「日本ペンクラブ」は、その一センターとして昭和10年に設立された団体で、現在、文筆家・ジャーナリスト・学者・映像作家など、1942名の会員で活動している。1976年以来、日本ペンクラブでは日本文学を広く海外に紹介する目的で、毎年一回、その年度の日本文学の概観、短編小説の全訳、および長編小説・評論・短歌・俳句・詩などの紹介文を英語の(一部は仏語も)『Japanese Literature Today』(略称: JLT)という一冊の本にまとめ、刊行してきた。その出版費用は、国際交流基金や日本ユネスコ協会連盟からの助成金によってまかなわれていたが、その助成金がなくなってきたことなどから、2000年度版の第25号を最後に休刊状態にあった。

日本文学の現状を伝えるため、新たな試みを盛り込んだ復刊『JLT』。

かつては、夏目漱石、川端康成、三島由紀夫、安部公房、

大江健三郎などが日本を代表する文学者として海外でも高く評価されていたが、それ以降の現代作家というと、目立った人物は出ていなかった。しかし、村上春樹や吉本ばなななどの登場で、再び、日本文学への注目が高まるようになった。

「海外の文学関係者や編集者などに会うと、次の“ムラカミ”はいないのかといった質問を受けることがあります。それだけ、日本文学への関心が高い。また、作家を含め、さまざまな表現者同士の国際交流の機会が増加するなかで、現在の日本にどんな作家がいて、どんな作品があるのかを海外に向けて発信していくことは、日本の文化状況を理解していただくための一助となる、大変に意味のあることだと思います。そのためにもJLTを復刊したいというのが、国際ペンという国際的な組織に属している日本ペンクラブとしての念願でした」

そう語るの、JLTの復刊作業を進める10名の編集委員のチーフを務める編集者の宮田昭宏さん(ランダム

担当者より



組織の理念に合致する民間からの助成は、大いに助かります。

社団法人 日本ペンクラブ
『JLT』編集小委員会 チーフ
宮田昭宏さん

来年9月には、国際ペンの総会である国際ペン大会が東京で開催されます。そこで、海外からおいでいただいた方々に、復刊された『JLT』を見ていただくことができるのがうれしいですね。

ハウス講談社文芸書開発室長)

「今回の全日本社会貢献団体機構からの助成は、JLT復刊の大きな礎石となりました。これはぜひとも実現しなければならぬと、関係者にとって励みにもなったし、年度内に完成しなければならないという、いい意味での刺激にもなりました」

復刊された『JLT2009』には、日本語を母語としない作家として初めての芥川賞受賞者となった楊逸の短編「ワンちゃん」をはじめとする3名の作家の短編全訳のほか、長編紹介では、これまで海外で紹介されることの少なかった日本のエンターテインメント作品の分野から、飯島和一の時代小説「出星前夜」が取り上げられている。また、2名の文芸評論家による日本文学の現状についての対談を掲載したほか、日本橋をテーマとして選ばれた短歌・俳句に、日本橋の今昔の写真を入れるなど、新たな試みも見られる。

「今回は英訳版だけになりましたが、日本語を他言語に翻訳するというのは、やはり大変な作業です。しかし、日本文化や文学への理解促進という意味で、価値のある事業だったと思います」と、宮田さん。なお、復刊された『JLT』は、海外の大学図書館や日本文学研究施設、国内の図書館、世界各国のペンセンターなどへ無償配布・贈呈された。将来、『JLT』を読んだことが、日本の文化や文学に関心を抱くきっかけとなったという研究者や文学者が出てくれば、すばらしいことである。